

おばあさんと鬼おに

いち

おだんこの すきな、そして、つまらないことにも よく わ
らう、のんきな おばあさんが いました。ある日ひ おばあさん
は、おひるごはんの かわりに むして たべようと おもって、

せつせと だんごを まるめていました。ところが まるめかけ
た ら一つを、うっかりして、ころんと どまへ おっことしまし
た。

「あらあら。」と いているうちに、おだんごは ころころ こ
ろがって行って、どまの すみっこの ちい小さな あなたの なか中へ
おちこみました。

「おお、もつたいない。」と、おばあさんは、お下りて行って、あな
の なか中へ て手を い入れました。と おもうと、まわりの つち土が ど

かどかと くずれわれて、おばあさんは、ごとんと その中^{なか}へ お
ちこみました。

はっと 目^めを あけて 見^みますと、いままで 見^みたこともない
あかるい さかみちの 中^{なか}ほどに、けがも なくて 立^たっていま
した。

「おやおや、これは 一^{いっ}たい どうしたことだろう。」と、おばあ
さんは びっくりしました。

「といえ、あの おだんごは どこへ いったらう。」と、あた

りを見まわしましたが、見あたりません。そこで おばあさんは、

「だんごよう、だんごよう。わたしの だんごよう。」

と、うたうように、ふしをつけて、そう いいながら さかみちを下りていきました。すこし いきますと みちばたに 小さな石のおじぞうさまが 立っていました。

「もしもし、おじぞうさま、わたしの だんごが ころんで きやしませんでしたか。」と おばあさんは たずねました。

「ああ、おだんごなら、ついさつき、下のほうへ　ころがつていったよ。だが、おばあさん、おまえも　ずいぶん　むこう見^みずだね。この　さかの　下^{した}は　鬼^{おに}の　くにだよ。鬼^{おに}に　つかまったら　どうする。」

でも　おばあさんは　へいきなもので、また「だんごよう、だんごよう。わたしの　だんごよう。」と　いいながら、さかを　下^おりていきました。すこし　いくと、また　おじぞうさまが　立^たっていました。

「おじぞうさま、わたしの だんごが ころんできやしませんで
したか。」

「ああ、だんごなら、ついさつき、下のほうへ ころがつていっ
たよ。だけど、おばあさん、あまり 大きな こえを すると、鬼
が くるよ。」

こういわれても おばあさんは へいきなかおで、

「だんごよう、だんごよう。」と、どなり どなり 下りていきま
した。すると さかの 下にも また おじぞうさまが つつた

つていました。

「わたしの だんごを お見^みかけになりませんでしたか、おじぞうさま。」

「うん、だんごは わたしが たべてしまったよ。けれど おばあさん、だんごどころじゃないよ。もうすぐ 鬼^{おに}が 出^でてくるよ、

鬼^{おに}が。さ、早^{はや}く わたしの きものの かげに おかくれよ。そうそう。そのまま じつと してるんだよ。いいかい。こえを たてたら おしまいだよ。」

そこで おばあさんは じつと かくれていましたが、なんだ
か おかしくなって わらわずには い
られなくなりました。

「くっくっ、くっくっ。」

「だめだよ、おばあさん。しずかに おし

よ。しっしっ。」

まもなく 鬼おにが やってきました。

「おじぞうさん、こんちは。」



「ああ、こんにちは。」とおじぞうさまも いました。

鬼は、いきなり くんくん はなを おに ならして、「おや、へんだぞ。」と だ いい出しました。

「どうも にんげんくさい ようだが、おじぞうさん、どっかに にんげんが きてるでしょう。」

「まさか。」とおじぞうさまは すましていました。

「いいや、たしかに にんげんだよ。くんくん。ほおら、にんげんの においだ。」

鬼おには こう いい いい、しきりに そこいら中じゅうを かぎまわ
りました。おばあさんは、つい 目めのさきで かぎまわされてい
るのが、くすぐったいようで、おかしくて おかしくて たまら
なくなり、とうとう「ぷっ。」と、ふき出だして しまいました。

「や、そこに いたのか。」と 鬼おにも つい わらいがおにになって、
けだらけの手てで おばあさんを ひっぱり 出だしました。

おばあさんたら、それでも まだ、「うふうふうふ、うふうふう
ふ。」と わらいつづけています。鬼おにも つい ひきこまれて「あ

っはっは、わっはっは。」と 大^{おお}ごえで わらい出^だしました。

おじぞうさまは あわてて、

「これこれ、その おばあさんを たべては いけないよ。」と、
とめました。

「はいはいね、おばあさん、うちの ごはんたきが いなくなっ
たんだが、おまえさん、きて はたらいてくれないか。」

おばあさんは それを きくと また おかしくなつて「うふ、
うふ。」と わらいました。

「それなら いいが、けっして この人ひとを いじめては いけな
いよ。」と おじぞうさまは いいました。

「だいじょうぶです。そんなこたあしません。さあ、おばあさん、
いこうよ。じぞうさん、さようなら。」

鬼おには 先さきに 立たって、大おおまたに あるいていきました。すこし
いくと、川かわの ふちへ 出でました。鬼おには おばあさんを こぶね
に のせて、じぶんで こいで むこうぎしへ わたしました。

鬼おにの　うちは　じき　その　ちかくでした。おお大きな、りっぱな
すまいなので、おばあさんは　びっくりしました。

鬼おには　すぐに　おばあさんを　だいどころへ　つれて行って、
しゃくしを　一いっぽん　もって来て、きごはんの　たきかたを　おし
えました。

「いいかい、おばあさん、おれんところでは　ごはんを　たくった
つて、おこめは　たった　一ひとつぶしか　入いれないんだよ。なべの
中なかへ　ただ　一ひとつぶ　入いれて　しゃくしで　かきまわしさえすれ

ば、一つぶが ひとつぶ いくらにでも ふえて、しまいに この なべ いっ
ばいに なるんだ。この しゃくしの 力 ちから だよ。わかったかい。
では さつそく たいておくれよ。」

「はいはい。」と おばあさんは、気 き がるに たすきを かけて、
おそわったとおりに、大 おお なべに おこめを ひと 一つぶ 入 い れて、しゃ
くしで かきまわしはじめました。と、なるほど、しゃくしを う
ごかすたびに ひとつぶ 一つぶが ふた 二つぶになり、ふた 二つぶは よん 四つぶにな
り、八 はち つぶになりして 見 み る見 み るうちに ふえていき、たちまち

なべいっぱいに、いいごはんが たけました。おばあさんは すつ
かり おもしろくなつてしまいました。

三さん

おばあさんは、そのまま ながいあいだ、鬼おにの うちの ごは
んたきを してました。鬼おには ちつとも いじめません。ごはん
たきだつて、ふしぎな しゃくしのおかげで らくなものです。

しかし、おばあさんは、そのうちに あきがきて、じぶんの う
ちへ かえりたくなりました。おだんごも たべたくて たまり

ません。

それで ある日、鬼おにの るすの あいだに、れいの しゃくし
を おびの あいだに はさんで、鬼おにの うちを にげ出だしまし
た。川かわの きしへ きますと、うんよく 小ぶねこが つないであ
りました。おばあさんは あたふたと のりこんで、どんどん こ
ぎだしました。けれど、川かわはばが 大たいへんに ひろいので、おば
あさんの うででは、むこうへ つくのが なかなかでした。は
んぶんも こぎでたころ、とうとう 鬼おにが おっかけてきました。

鬼おには　うちへ　かえってみると　おばあさんが　いないうえに、

たいせつな　しゃくしが　なくなっているので　かんかんに　お

こつて、かけとんできたのでした。けれど　ふねは　一いっそうしか

ないので　どうにも　しかたが　ありません。鬼おには　こまつて、

かんがえぬいたあげく、きしへ　しゃがんで、おお大きな口くちで　川かわの

水みずを　がぶがぶ　のみはじめました。すると　水みずは　ぐんぐん

へっていき、おばあさんの　ふねが　もう一ひといきと　いうところ

で　川かわは　からからになってしまいました。鬼おには　びゅうびゅう

とんで おっかけて きました。

おばあさんは こまっつて、やけはんぶん

ふねの なか中に た立ち上がり、おびの あいだ

から だしやくしを とり出して、それを ふ

りふり おどりを おどりはじめました。そ

の て手ぶり みぶりが とても おかしい

ので、鬼おには つい「うわっははあ。」と だふき出しました。その は

ずみに みずおなかに いちすいこんでいた だ水を だ一どに だふき出して



しまったからたまりません。川は かわ もともとどおりに ふかくな
って 鬼は おに ぶくぶく おぼれ出 だ しました。

おばあさんは そのあいだに ぐんぐん むこうぎしへ こぎ
つけました。ふねから とびおけると、おじぞうさまの いられ
る さかみちを どんどん かけ上 あ がって、ひさしぶりで おう
ちへ かえりました。

おばあさんは そのご、れいの しゃくしの おかげで お金 かね
もちになり、すきな おだんごも まいにち こしらえて たべ、

あいかかわらず、のんきにわらってくりました。

